

6 3 左右空間圧縮技法

カラヴァッジョの好んだ技法

2024

真鍋友範



《聖ウルスラの殉教》1610 カラヴァッジョ

*写真図版はウィキペディアより

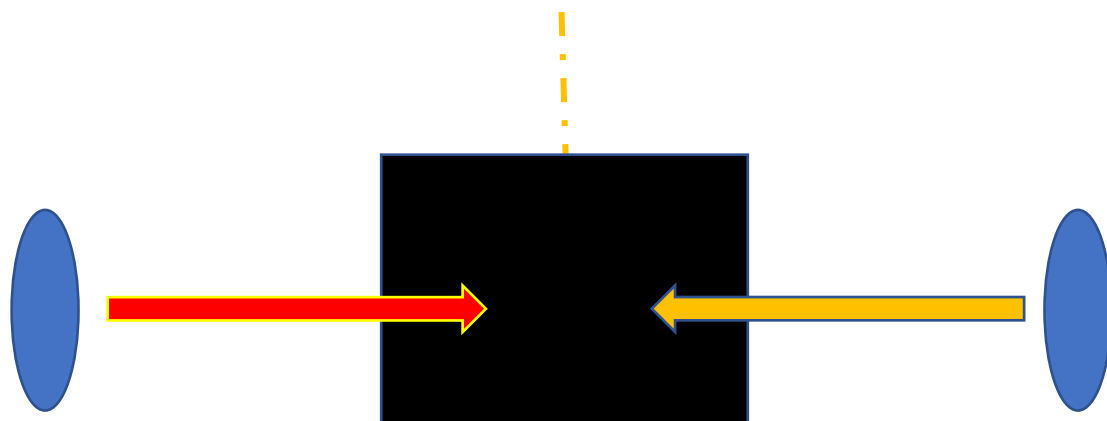
この作品通りの配置でフン族の王、聖ウルスラが対峙していると判断する方は、おそらく【絵痴】である。

メインの人物である踏んで族の王と、聖ウルスラの距離は、おそらく数メートルから数十メートル離れている。

しかしながら、絵画面のスペースの都合により、極端に左右の距離を無視し、中央に集めたように描かれている。

この技法は、カラヴァッジョの《聖マタイの召命》、《ラザロの復活》でも用いられている。

しかも、これはカラヴァッジョの発明ではなく、ルネサンス絵画では、よく用いられた描画形式だ。



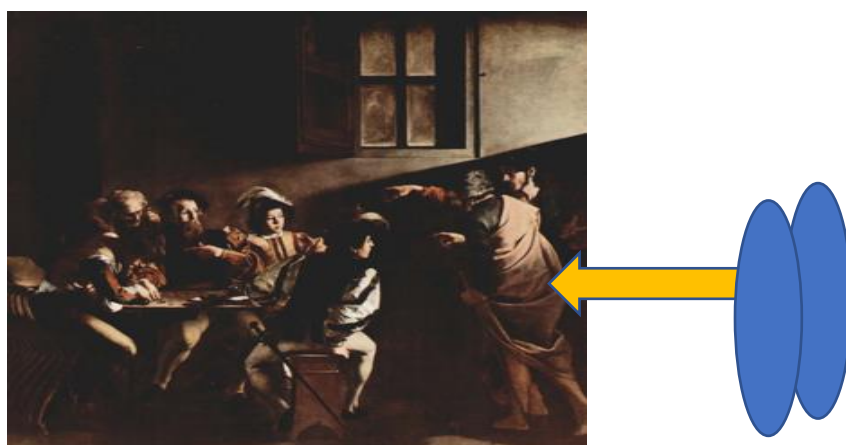
この作品を見る人は、二つの時間を追体験することになる。
矢を放ったフン族の王の瞬間の姿だけでなく、その一連の直前動作まで見る人は連想する。

つまり、【時間の流れを感じることで、動画の疑似体験をする】のだ。

このテクニックは、他のカラヴァッジョ作品にも普通に見受けられる。

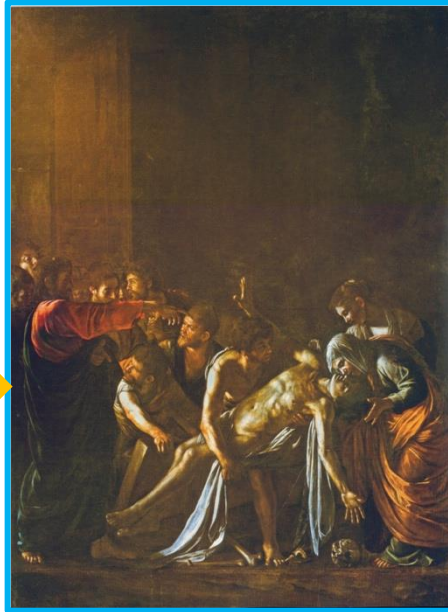
例えば、《聖マタイの召命》では、1) 髭男がイエス一向に気づく。2) どちらを呼んでいるかを尋ねる。3) イエスは質問を受け入れる 4) イエスは視点を移動する。5) 右腕を回し、向こう側の人と答える。同時にマタイを呼ぶ。

これらの一連の動作が連続することで、観賞者に時間の流れを生じさせ、同時に動画の疑似体験を生む。



《聖マタイの召命》1600 カラヴァッジョ

最晩年の1610年に描いたとされる《聖ウルスラの殉教》も、初期の《聖マタイの召命》と同じく左右空間圧縮技法が使われている。



《ラザロの復活》 1609 カラヴァッジョ

これらの例のように、カラヴァッジョは、特に逃亡生活の後半において、この構図を愛用したようだが、心の隅には、初期にローマで好評であった《聖マタイの召命》で用いた構図での記憶が残っていた為ではないだろうか。基本的に同じ構図技法を生涯使用している。